

# リボーに於ける創造的想像力の分析

西村 嘉彦

大奈翁の没落とこれに続くメッテルニヒの時代は、思想的には中世の復活、浪漫主義の全盛時と云つてよいが、七月革命、二月革命を契機として大陸の思想は漸次實證主義的傾向を主流とするにいたつたこと縷説を要するまでもないが、フランス精神科學の領域において、實證主義が唯物的機械觀に陥る危険を救助して、これに生命と現實性とを與へてゐるものは、なかんづくメーヌ・ド・ピランに淵源する心理主義的生命觀で、デカルトの根本命題とせる思惟的自我的存在が、彼の内省的明證性の眞意に反して、しばしば悟性的存在判斷の範疇において理解せられる危険あるに對し、ピランは最初から意欲的自我として、自己をその活動性において、主體的直觀的に把握してゐるのである。この主體的自我活動が内觀的反省的に記述せられてくるところに、たとひその心理

主義的哲學が一面場所的考察を排除してゐるとする非難が浴せられようとも、反面人間性の全體的な有機的活動性が保存せられてゐると言つてよいだらう。この主體的生命觀と實證的傾向とを併せ、しかも人間機能をその疾患性の方面から分析理解せんとするのがリボー (Th. Ribot) の採つた態度と云へる。けだし精神の構造はそれの病的状態において反つて眞實の内部構造を露呈するがゆえに、その實相を窺知し得るものなのである。

フランス唯心論の傾向は、精神をその活動性、意志性において捉へんとするものであるが、リボーも人間を運動的主體として把握する。メーヌ・ド・ピランは思惟能力の分析を行つて感覺といふ言葉のもつ二義性のゆえに、意識の原始事實としては却つてこれを斥けて、印象といふ言葉を用ゐ、しかもそれに受動的印象と發動的印象との區別を設け、感覺は受動的印象の、知覺は能動的印象

の支配的な形態であると言ひ、しかもその能動性は自我の自發性と筋肉および對象の抵抗の受動性といふ二項の對立的統一として理解せられてゐる。(Maine de Biran, *Influence de l'habitude sur la faculté de penser*, Introduction.) すなはちビランの解した知覺は、單なる外界の模寫でなくして、自我の發動性によつて規定せられるごとき能動的なものでなければならぬ。視覺は感覺のなかでも最も外向的なものであるが、見る *voir* が視る *regarder* になるためには、視覺が觸覺と結びつかねばならぬと述べてゐる。注意は意識的視野の限定、一點への凝集であるが、それは同時に觸覺の異常な緊張を必要として來る。ビランは聽覺と發聲器官との結合に重要な意味を認めてゐるが、リボーは視覺と發聲器官との結合において、前者に多く排除せる運動性の代價を認めてゐる。嗅覺や味覺などは、動物において極めて高い位置を保つてゐること言ふまでもないが、有機的感覚、呼吸や循環、消化などにおける變化から結果する感覺といへども決して運動的要素を排除せるものと見なすことは出來ない。ある人々においては嘔吐や、吃逆、尿通などの現象が、ある種の視覺や聽覺から起つて來ることを、見てもこの種の感覺表象が行爲に轉換される傾向をもて

ること明であらう。

一般に構成心理學の立場は、統覺による抽象作用によつて分析を行ひ、そこに究極的な心的要素を見出さうとする。なるほどこの心的要素は日常經驗においてそのまま與へられるものでなく、抽象作用の所産であるかも知れないが、科學の本領が分析にあるとき分析を加へることは當然の過程であり、そこに發見せられた *a*, *b*, *c*, *d*... のごとき要素の複合によつて、たとへば *A* なる知覺の内容を理解するのである。この場合 *a*, *b*, *c* などは知覺 *A* に對して感覺と呼ばれるものとなつて來る。知覺は感覺および表象を部分的要素とする複合的實在である。即ち知覺は、現前の對象によつて觸發される要素的意識内容としての感覺と、これに加はる再生的表象とを構成内容とするものだといふ。周知のごとくゾントに於いては、感覺は性質と屬性といふ二つの屬性を有してゐる。

かうして實在的要素と考へられた感覺はさらにその作用面と内容面に區分せられて意識生活全體の構造理解の基礎を形成する。たとへばリップスは、意識生活の比較的自然な出發點として諸自我の感覺を擧げ、「赤」の感覺は、私における觀念的な、私によつて直接に體驗され

得る出来事、即ち赤といふ感覺内容の所持と、所持されたる感覺内容、印象、といふ二契機に、一般的には意識體驗と體驗内容の二つに分割し、さらに感覺内容にその空間的ならびに時間的配列、その繼起ないし共存が附加され、かくして成り立つた全體的心像を知覺の内容と稱してゐる。したがつて知覺、あるひは感性的知覺は、感性的感覺の概念に比すれば、より一般的、包括的な概念であるといつて可い。Th. Lipps, *Leitfaden der Psychologie*, Erstes Hauptstück. しかし問題はこの

「附加」であり、出發點にとらへられた感覺の靜止的模寫性である。一體生命存在にとつてもつとも重大な關心は、生きるといふことであり、生きるといふことは、生物體がその生活空間において生をいとむといふことでなければならぬ。『有機體の各部分には恒常的な活動性ないし過程が存するけれども、各々の活動もしくは過程は、この活動性の唯一的な表現たる正常構造とともに、ある特殊な仕方方で維持ないし再生せんとする傾向をもつ。……生物體の身體と、生物體の生活には入つて来る限りに於けるその環境とにおいて觀察せられた構造と活動の兩方とも、相互の間に能動的に維持せられてゐる相關性を具象化したのである』(Holdane, *The Philosophy*

of a Biologist, p. 41 and following) 生命は身體と環境との能動的維持であり、その相關性は兩者の單なる機械的關係でなくして、力學的な交互作用でなければならぬ。かくして生物體としての人間の知覺も亦この點から考へ直されねばならぬであらう。

『そもそも知覺も、廣義における生活體の行動といふところから見れば、その「生活空間」におけるそれぞれの事態に對する個體(生物)の反應の、一つに外ならぬ次第です。もとよりこれは、普通に行動主義心理學で取扱はれてゐるやうなあらはな、すなはち、外面に現れて見える行動ではなくて、むしろ全體として、外的事態の認知にとどまるところの感性經驗にちがひありませんが、これも心理的生活の分面として、必然他種の經驗と緊密な脈絡を保ち、生活體の(全體過程たる)行動の特殊方面とじての意味を含蓄するものです』(佐久間鼎、空間行動と知覺の發展、一頁) もちろん生活空間は終始生物體に順應的な環境を提供するとは限らない。しばしばそれは生物體と逆縁的な關係においてすら存在する。かくして生物體は生活環境の急速な事情の變化に對し、臨機應變な反應をなさなければならぬ。有機體はしたがつて形塑性を有しなければならぬと言へよう。ここに敏速、

な刺激感受の器官が整備されてくる必然的な理由が存し  
よう。生活空間の緊張は生物體の異常な刺激感受と言は  
なければならぬ。しかもこの感受性は下等動物において  
特に觸覺を中心として展開されてくる。けだし觸覺は  
生物體の生活空間内における運動性、移動性ともつとも  
密接な關係を有するがためである。ここに「運動なくし  
ては知覺は存在しない」といふ意味深き命題が成立して  
くる根據がある。しかしそれは同時に「知覺なくしては  
運動が存在しない」といふ定式と相表裏するものでなけ  
ればならぬ。

動物の行動は、そのいづれを問はず、ただちに生活  
環境をめざしてゐますし、そこに捉へられた事象は、そ  
のまま自己の行動を誘發せずにはすまないものです。動  
物はその環境と共にユクスキユルのいふ「運動旋律」  
Bewegungsmelodie を演奏し、生活空間を體して踊る  
のです。さはゆる「環境指向性」Umweltenhinfähigkeit  
において、生活空間を、またその事象を直接に體感する  
といふことも出来ませう。(佐久間 同上、六一頁) 生活  
空間を體して踊るといはれる生物體にとつて知覺は、そ  
れの生活空間に於けるそれぞれの事象に對する個體の一  
つの反應にほかならないと言へる。しかもこの知覺を生

活空間の大小に比例して遠感と近感とに分類すれば、視  
覺は前者の極點に有機感覺は後者の極點に存在するとい  
ふことができる。觸覺を軸とする遠感と近感とは、同時  
に對象認識の外向性と内向性とを表すと云つてもよいで  
あらう。前者においては對象と個體との距離が大なるた  
めに、やがて思惟を媒介とする對象認識への契機となる  
に反し、後者においては兩者の距離が小なるために、感  
情的感覺に近接の契機を形作ると言へよう。かくて遠感  
的知覺は高度の對象性を特色とする感性經驗であり、對  
象への指向性を鮮明にするところの意識であり、いはゆる  
客觀的經驗の根幹をなすと言はれる。かくして勝義に  
おける知覺はこの種の感性的經驗を意味するものであら  
う。

ジェームズによれば、感覺とは意識する際の最初のも  
のである。感覺は神經流刺激が腦に入りてまだなんらの  
暗示をも興へず、過去の經驗との聯想をも生ぜぬ以前に  
意識に生ずる直接の結果であるが、かかる直接感覺は誕  
生直後の嬰兒に發現し得るにすぎず、通常の感覺におい  
ては感覺器官が傳達する印象が生ずる大脳反應には、そ  
の前の印象の痕跡が喚び起されて働いてゐる。それゆゑ、  
感覺的腦髓過程と再生的腦髓過程との結合が、われわれ

に知覺の内容を與へるものであるといひ得る。(W. James, *Textbook of Psychology*. Chap. II.) ベルグソンによれば『吾々の感覺と吾々の知覺との關係は、吾々の身體の現實的活動と、その可能的または潜在的活動との關係に等し』(Bergson, *Matière et Mémoire*, p. 48) 『生物は自己に利害關係なき外的作用を通過させ然らざる作用を分離する。しかもこの分離によつてその作用は知覺となるのである』(ibid. p. 24) 『知覺は、生體の活動力、即ち、與へられた刺激に伴生する運動または動作の非決定を表示し、またこれと比例するものである』(ibid. p. 56) しかもこの非決定はわれわれの身體をとりかこむ諸形像のそれ自體への反射、むしろその形像の分割において現れて来る。ベルグソンの解した知覺は、最初から運動的要素のもとに思考されるものであり、意識は諸形像そのものの自己反射、行動體自身の放射作用と稱すべきものであらう。しかし生體の機能は刺激を受けとつてこれを豫見し得ざる反動に仕上げることに存するが、さればとて如何なる反應作用を選択するかは決して偶然によつて決定せられない。その選擇は苟そらく過去の經驗の影響を受け、その反應作用は必ず類似的な状態、位置の残した記憶に訴へて行はれるものであり、

過去の心像はたえず現在の知覺と混淆し、またそれによつて代ることすらある。かくして知覺はその運動性においてとらへられ、その時間性において解明せられてゐる。あらゆる知覺はなんらかの程度で運動性を前提し、したがつて過去の知覺の殘基である表象はまた運動的要素をふくむといはねばならない。

メース・ド・ピランに始まりベルグソンにいたるフランス心理主義的生命哲學は、以上瞥見したごとくその兩極において運動性を中心として展開してくるものであるが、同じ流れに棹さすりボーも又この立場からその獨特なる實證主義的心理學を發展させてゐる。『現代心理學の主要な勝利の一つは、それが運動の位置と主要性を確立し、特に觀察と實驗とを通じて、運動の表象が始發的運動、誕生の状態にある運動であるといふことを證示した事實である。……まづ第一にあらゆる表象は運動的要素を含蓄するであらうか。然り、けだし一切の知覺はある程度まで運動を前提し、且つ表象は過去の知覺の殘基であるか』(Hilbot, *Essay on the Creative Imagination*, transl. by A. H. N. Baron, p. 3-4) 『意識のあるところ活動が行はれてをり、意識は反射鏡であるところか、行動的、生産的である。大多數の現

代の學說、種々の妙想も、この眞理においては一致してゐる。生物學的、實用主義的學派から、自由の形而上學にいたるまで。意識の生物學的な意味づけ、感覺の功利的な性格、世界における自己の方角づけのための符號、現在の活動を豊にするとともにそれに指針を與へるところの表象、記憶、蓄積せられた經驗、現在の活動を經驗によつて確立せられた規則に従屬せしめる觀念や圖式、豫告と警告を與へる感情狀態。これらのものが極めて通俗的になつたいくつかの命題であり、且つこの意識の持つ機械的 성격が時として極度の目的論にまで進められることがある。運動的現象の役割に關するリボー及び他の多くの人々の業績も同じ様と呼ばれることが出来る。たしかにリボーの主張するところは正しい。しかし一つの欠點がある。それは活動の手段としての運動を、活動そのものと考へ、筋肉のなかに活動的ないし精神的指向性の鍵を見つけようとした點にある。もつと高次のものへの必要がある。(H. Delacroix, *Les grandes formes de la vie mentale*, p. 3) 知覺は運動性を前提し、運動性は生活空間の中の個體の反應として解明せられて來た。しかし人間は生物體と本質的な相違をもつ。一般にその差異を本能と知性として把握するやうである。しか

し知性とは具體的に何を指すか。本能は盲目的な生の衝動であり、知性は直接的生の否定に成立する。前者は自然的必然の世界であり、後者は合目的的自由の世界であるとされる。しかし心理學的な立場よりすれば、兩者の間にはかく絶對的な質の斷絶があるとは思へない。ベルグソンは知性の空間性に對して、直觀の時間性を強調し、しかも直觀を生の衝動、即ちエラン・ヴィタルの中にとらへようとした。生の本流はその原始的なものから人間にいたるまで一貫して脈々と流れて行くものを持たなければならぬ。生の本流は一端において人間、他端において膜翅類にその絶頂點が見出されるとする。しかし果してベルグソンの解したやうに、空間性を撥無する點にのみ生の具體性が展けて來るであらうか。哺乳類のあるもの、昆虫のある種のものに顯著に見られる叡智の閃きは、單なる本能、生得的な必然性にのみ還元し得るであらうか。

ベルグソンによれば生物は自己に利害關係なき外的作用を通過させ、しからざる作用を分離する、しかもこの分離作用によつて知覺となるといふ。知覺は單なる模寫ではなかつた。しかし單なる分離だけでも知覺といふことが出来ない。純粹知覺は理論上のみの存在であるとい

はれる。知覚には時間的に過去の面において再生的記憶の侵入があり、現在の面において利害を樞軸とする外的刺戟の選擇が、未來の面において豫告、警告の先取性による限定があるといはれるとともに、それは同時に空間的に、二次元的平面から三次元の立體性にまで止揚されねばならぬ。もし前者を知覚の綜合的側面と解すれば、後者は分析的側面といつてよい。知覺的認識はその初歩性において綜合面と分析面を併有する。「極めて稀有な場合を除いて、精神があたかも鏡面のごとく外的印象を反射するとき場合（おそらくは驚異の最初の瞬間とか純粹感覺に接近せるやうな状態において）であるにしても、知的活動は常に次の二つの型の一つに還元し得る、即ち一方で聯合、統合、統一、他方で分離、隔離に、これら二つの本質的な作用は、最低のものから最高のものいたるまで、認識のあらゆる形態の根柢に存し、その構造の單位を構成してゐる。」(Ribot, L'évolution des idées générales, p. 5) 分離作用は單なる辨別ではない。それは同時に抽象であり、抽象は客觀的には對象のもつ特殊性、主觀的には個體のもつ性向なり關心なりにしたがつて、そこに意識の定着が行はれること、この定着物がやがて獨立的に主體に對して限定し、兩者の相互限定

リボーに於ける創造的想像力の分析

を通じて概念の世界に到達することを意味する。概念は單なる符號ではない。内容なき空虚な形式ではない。言語を象徴として把握した人もゐる。(カッシーラー) 概念は象徴である、外面的に見れば唯名論者のしか解するやうに單なる架空物であらう、が精神活動の具體性の象徴と解するとき、却つて高次の理念的實在であるといはなければならぬ。抽象作用の分離性に對應するものが聯合作用の統一である。知覺は時間の三樣態に即してそれぞれの綜合面をもつと述べた。しかし知覺は其の意味における聯合ではない。純粹知覺は反つてその純粹性において知的であるといはれねばならぬ。知覺のもつ綜合性は同化作用であるといふことが出來よう。たとへばウントは再生的同化 (die reproduktive Assimilation) による心像の構成を説き、しかも過去の再生的表象と現在の知覺心像が結合するとき、その二要素の結合によつて生じた生成複合體にあつては、相互に結びついた表象中心から個別的要素がいつも同時に消失されるので、出來上つた表象は構成要素いづれのものとも等しからず、ただ類似せるものにすぎないとする。しかし問題はこの綜合作用であり、その結果派生する新しきものの解釋である。リボーは抽象作用の段階を三つに分け、その低次的段階

に受動的同化作用、中間、高次の段階に能動的同化作用を認めてゐるが、けだし概念は抽象的符號であるとともに、一般的即物的でなければならぬ。抽象作用は對象のもつ特性の抽出であると同時に、多數の對象に見出される共通屬性の抽出であるがゆゑに、諸對象の比較、並びに同一特性の強調、同化的沈澱として一般化作用をもたねばならぬ。しかもそれが高次の概念形成においては、低次の類的心像形成と異なつて、判断作用を前提としなければならぬ。『概念は常に判断である。∴∴∴概念は種々の差異を排除せる（明示的ないし暗示的）類似判断の結果である。』(L'évolution des idées générales, p. 105) かくして同化作用は抽象作用を裏付け、さらに判断作用そのものの必然的契機となることに、他面想像力の必然的契機として重要な心的作用をいとなむものと言はねばならぬ。

## II

カントはその「形而上學講義」において形成力を分析して、(1) 現在の時間の表象であるところの現形成 (Aktbildung) の能力、(2) 過去の時間の表象であるところの追形成 (Nachbildung) の能力、(3) 未來の時間の表象であるところの先形成 (Vorbildung) の能力、から成つ

てゐるとする。(Vorlesungen über die Metaphysik, F. F. O. S. 38) 即ち形成力は時間の秩序にしたがつて分類されてゐる。もちろんカントは形而上學の立場からの區分であつて、我々が當面問題にしてゐる心理學の立場とは無關係であるとも言はれよう。しかしこの分類から得られる大きな暗示は、形成力にあたる聯合作用がやはり同じやうな時間の秩序に應じて得られるのではないかといふ示唆である。これに極めて大きな信憑性を與へるものが、やはりカントの心理學的見地を表現してゐると見られる「人間學」において、想像力が生産的 produktiv と再生的 reproduktiv の兩種に區分されてゐることである。また想像力の機能が、悟性ならびに理性に對して一の獨自な存在性、重要な位置をたもつてゐることに注目したのは一般に美學の祖といはれるバウムガルテンに於いてであらう。彼は上級認識能力に對し、下級認識能力を辨別してゐるが、その中で構想力 (phantasia) および想像力 (facultas imaginis) が數へられつゝゐる。

私はこれら哲學者達によつて解明され注目されて來た想像力の歴史的系譜を追はうとする積りはない。要は想像力の獨自性と、しかもそれが時間の様態に比例して分類されてゐることに注目すれば足りる。けだし想像とい



ふ言葉は日常性の立場に於いて三つの相異なる観點から用ゐられてゐるやうである。即ち先づそれは再生的なものとして過去の表象の喚起と關係し、しかも表象された心像を要素的に分解し、これらの要素を新しい結合關係に置くこと。第二に過去の經驗的心像とその習慣的聯關性から現在の知覺の一端、すなはち一知覺心像の認知によつてこの心像が隨伴する、もしくはその心像を部分的要素とする全體者を推測せんとするもの、第三に各種の表象を自由に結合せしめることによつて新しき實在を創造すること。以上三つを簡單に表象的、推理的、構想的と呼ぶならば、想像作用はこの三つの類型に還元され、しかもそれらが時間の秩序に配當され得ること明であらう。

もちろん表象即想像ではない。殊に表象なる術語は心理學の立場の異なるにつれて數多くの觀念内容を有してをり、大脇義一氏によれば『第一はこの概念（表象）の外延を擴張して知覺を含ましめること、即ち表象を以て對象意識一般を指さしめむとする見解であり、第二は單に像として内容的に解すべきでなく、表象は志向的な心的作用でなければならぬといふ見解であり、第三は感覺の模寫の再生ではなくして是を素材とはしながら是に對

リポーに於ける創造的想像力の分析

して主觀の創造的契機が加へられたものが見出されるといふ見解である。』（表象の心理學）三〇頁）ここに示されてゐる第二、第三の意味の表象概念は、それが單に客觀的な表象像につきず、表象作用ないし主觀の活動性の附加といふ點である。この外表象と知覺との間には多くの中間的形態が認められるといふ點、ならびに過去の表象としての再生的表象にも、未來の契機、創造性の契機が認められるのでないかといふ點が特にわれわれの關心をひく問題である。『單純な同一の音の連續をば、甲の人は三拍子に聞き、乙の人は四拍子に聞くことがある。又個々の音が夫々皆異つてゐる音系列であるにも拘らず、旋律として前の音系列と全く同一に聞えることは音樂で屢、行はれる轉調に於て人の知る所である。是等の事實は何れも旋律表象又は音形態の表象が唯だ感覺として「與へられたままのものではなく、感覺を素材として」主觀に於て主觀自身によつて」成立せしめられたものであることを示す。……是をヴィタセクは感覺に對して創造表象と名づけ、創造表象を成立せしめる主觀の活動過程をば表象創造作用と呼んでゐる。マイノングが高次の對象とか基礎づけられた對象とか呼ぶものは、この創造的表象をばその對象の側から眺めたのに外ならない。創

造表象の對象は高次の對象である。高次の對象は刺激に觸發された感覺器官の直接の産物ではない。低次の對象と異り非實在的である。ここに吾々の注意すべきは特にグイタセクが創造過程を認めてゐるのは所謂創造表象だけであつて、感官知覺及び再生表象に是を認めてゐるのではないことである。けれども筆者はそうは考へない。創造過程はなるほど創造表象の産出に於て最も著しいことは確かである。がそれは程度の問題であつて、たとへば表象であつても、多くの場合は決して過去の體驗そのままの模寫の再現ではない。知覺も亦そうであつて廣義の表象は一般に多かれ少かれ創造的過程であると云ふことが出来るのである。『大膽義一、前掲書、一一九—三〇頁』

再生的表象が創造性をふくむにしても、眞の意味の創造性は創造的想像力の活動にまたなければならぬ。再生的想像力については多くの研究がなされてゐるにも拘らず創造的想像力については餘り多くが語られてゐない。特に前世紀末の心理學の發達段階において然りである。ここにリボーの採り上げた未知の領域が開けて來ると云へよう。

ジェームスによれば、一度經驗せられた感覺は神經組織を變化し、本來の外界からの刺激が去つた後も心の中

にその感覺の模寫を生ずる。ところで想像とは嘗て感じられた原物の模寫を再生する能力に與へられた名稱である。想像はその模寫があらぬまゝである時は「再生的」と稱へ、異なる諸原形の諸要素が新しい全體をつくるやうに組合せ變へてある時は「創作的」といふ。(Op. Cit. Chap. XIX) 以上諸家の説を参照するとき、我々が意圖する想像力の分類は十分なる根據をもつといつてよいであらう。しかし時間的狀態に即して語れば未來の創造は過去の傳説のうちより行はれるごとく、創造的想像活動は再生的想像作用を基礎とするものでなければならぬ。もちろん後者においては前者におけるよりは、運動的要素においてはるかに優勢であること言ふまでもない。しからば前者より後者への移行はいかなる現象において確認せられるであらうか。

けだしリボー心理學の立場は對象認識の方面において連續的發展論をとり、その發展形態を事實に即して確認せんとするものである。古典的な試論と稱すべき *Imagination creative* (但し私の參考出來るフランス原典が存しないので英譯書によつて解説したい) 序論において、先づ生理學的な事實を學證してゐる。『單に想像の結果によつてのみ身體の各部に現れる疼痛や苦痛について

ては多くの實例が報告されてゐる。ある人には任意に即ち強烈で根強い表象によつて心臓の鼓動を増したり禁止したりすることが出来る。有名な生理學者 H. F. Vogel はこの能力をもつてをり、この想像の構造によつて敘述してゐる。もつと注目すべきは暗示によつて催眠せしめられた被術者に生ぜしめられる發泡の現象である。最後に、十三世紀から現今にいたるまで、數が非常に多くて且いくつかの興味ある種類を示して來た——あるものは單に十字架、他のものは答、また荊冠の印形をもつてゐる——聖痕を受けた人々の根深い物語りを回想してみよう。(五—六頁)また逆に「觀念による癲癘」の現象、たとへば自分は手を舉げることができないといふ内部雜信が彼に對していかなる運動をも不可能にすることがある。これらの例はたとひ有機的現象に止まつてゐようとも、新らしい現象の發現にちがひない。『現れてくるものは新しいものであり、……個體の生活においてはなんらの先行者をももつてゐない。』(六—七頁)しかし單なる表象だけではこれらの現象を發生せしめる十分な條件といふことが出来ない。かかる現象の生起は『かうならねばならない、とする熱烈な信念、強烈な欲求をもつてゐる人へのみ起つてくる』(七頁)即ち一方には心像に含ま

れる運動的要素が、他方には個體の精力を集計する感情的状態なり傾向なりが必要とされて來るのである。

この種の心理——生理現象から構想力本來の活動への距離は極めて大きいかも知れない。けだしここでは創造活動は有機體のみがその素材になつてをり、創造者そのものとの分離がない。また創造活動は極めて單純なものであつて、普通の意味における構想力(私は今後一般的に意味でいはれる再生的想像力に對して創造的想像力のことをかく呼んで行かうと思ふ)の構造は極めて複雑なものであるから。また前者はその複合性において簡單であるに對し、後者ではいくつかの苦悶作用的心像が、相互に結合したり、整理、排列、集合状態を作つてゐるから。しかし上述の實例は單に『再生と生産との間の移行段階を見出し、純粹の表象能力と心像の媒介による創造能力といふ、二つの形態の想像力の共通の起源を示さんとする』(同、八頁)ものであり、又『心像以外に、他の因子、本能的ないし感情的形態の因子の存在を示す』(同)目的に基づいてゐる。構想力の活動形態は多くの要素から成立し、しかも又それが創造的綜合統一の中にもたらされねばならない。

『構想力の本質は綜合し、統一すること、かくして形

を作ることにある。』(三木清、「構想力の論理」参照)しかし形は一つの理念にもとづき、一つの目的を中心として形づくられねばならない。それは單なる理念の現實化ではない。生の根底に根ざす不定なる理念として新しきものの創作意欲を刺戟するものでなければならぬ。構想力の活動領域は普通原則として美的活動、藝術の分野に働くものをされる。それはたとひ一般の人間に含有されておようと、通常天才のもつ天賦の才能と目され、神來の妙想と解せられてゐる。しかし構想力は決して藝術家によつてのみ獨占されるものでなく、あらゆる領域の生命活動に主要な契機となつてをり、また程度の強弱こそあれ、すべての人々に多かれ少なかれ内在せるものと見なければならぬ。構想は創造であり、人間性自體の發展である。

## 三

『構想力は精神生活における第三形態である、もし第一層が感覺および單純感情であり、第二層が心像およびそれらの聯合、ある種の初歩的論理作用などとするならば。』(同、一二頁)構想力は複合的存在であり多くの要素に分解し得るとともに、それらの要素を必然的成素として綜合的に形成される第三次的精神形態でなければならぬ。

らない。リボーはこの構想力を先づその分析的に取り扱つて各成素の構造を解明し、ついでそれらの綜合的原理を求めてゐる。前者においては知的要素と、感情的要素、無意識的要素を擧示し、後者においては理想ないし固定觀念、固定感情を統一原理と看してゐる。我々もこの敘述順序に従つて構想力の分析を紹介し、それと他の心的活動との相關性を指摘してみたいと思ふ。

しかしこれらの問題に入るに先立ち豫め検討してみなければならぬ問題は、リボーが右に述べた精神生活の第二層を心像 *images* およびそれらの聯合 *associations* ならびに初歩的論理作用と解し、構想力はそれらを越える第三層であると論じてゐる點である。私はさきに知覺を生物の根源的認識活動であると述べた。しかも知覺には綜合作用と分析作用が相表裏しながら相補的な關係においてあることを明にした。前者はやがて聯合、判斷のごとき高次の心的作用に、後者は分離、抽象のごとき高次作用に發展すべき素地を提供するものといつてよい。しかし判斷はある種の聯合を、抽象作用は判斷活動を必然的豫備契機とする點に兩者の深い關係が見出されるが、ここに解明さるべき構想力もまたある種の聯合を同様契機として要求してくる點に、心的構造の全體的な脈絡性

が興味の高さと研究の困難性をひき起して来る。判断は現實の對象に對して個體の下す断定であり、推理は判断の結合による未來的なもの洞察である。しかも構想力との深い想像性を示すものは、この推理作用が特に想像的推理といふ形態を探るとき兩者の構造が示す類縁性にほかならない。

感情の論理に對する洞察は、リボーに依ればオーギュスト・コントに始まり、ステュワート・ミルに於いて若干觸れられてゐる問題であるが、いづれに於いても十分な解明を見てゐない。そこに彼の名著 *In Logique des sentiments* の古典的な價值が存してゐるといふことよ。

ところが感情の論理は、決して感情といふカオスの存在のものカオスの論理といふ意味でもなければ、感情性の悟性論理的手続きによる解明でもない。論理に絶對に對立する非合理的な感情的生を絶對媒介的に悟性と媒介自覺せしめんとするものでもない。古典的な分析にしたがへば、人間の精神生活は、智、情、意の三つに區分される。しかし如何なる意味においても他の要素を排除するごとき絶對的な智もなければ、情も意もない。ただこれらの要素が智の形式情の形式に統合されるとき、これを上述の名辭をもつて呼び得るといつてよい。リボーが

リボーに於ける創造的想像力の分析

採り上げた感情の論理は、たとひ知的要素を含むにしても、それが感情の内容を構成する素材的意味をもつにすぎないやうな感情性が横糸、縦糸となつて編み出される論理形式、即ち判断および推理が、悟性論理におけるそれらと並行的な存在性と價值をもち、悟性論理は却つてこれらの價值論理から派生せるものにすぎないことを示さんとするものである。それは要素的論理學者のいはゆる事實判断に主體の價值意識が加はつて價值判断が成立するものでなく、價值判断自身の自己分裂によつて、純客觀的な事實判断が成立することを論證せんとするものである。けだし形式論理はプリステレス以來、中世の神學的論理を経て、現代にいたるまで論理の自律性と先驗性を誇示し來れるものであり、これに對して科學としての心理學が論理現象を説明せんとするにいたつて、論理主義と心理主義は鋭く對立して來たのである。

リボーにとつては論理活動は二つの見地、即ち自然的事實として、また證明の條件を決定する學として觀察され得る。『兩者はそれぞれ特殊な任務を所有してゐる。一は現象を確認することであり、他は規則を作成することである。前者は普通我々がいかに思惟するかを探求し、後者はいかにして我々は正當に考へるかを探求する。一

は具體的な方法を、他は圖式論的方法を採用する。(La logique des sentiments, Introduction, p. 6) しかも彼がかかる客觀的方法で採り上げて來た論理現象は、いはゆる悟性論理でなくして、却つてそれと並存し、その母胎ともなるべき感情の論理であつた。この論理における推理形式としては『その推理作用を織りなす全體の横糸が感情的であるといふこと、即ち同一状態にとどまらうとも、自己を變形せしめようとも、知的状態の選擇と連鎖性とを限定するところの感情状態によつて構成されてをり、知的状態は畢竟するに外衣であり、この論理形式に具體性を與へるための必要な手段にすぎない。』(Ibid. pp. 2-3) またその判断および推理作用は『行爲なし言葉によつて断定を行ふこと (Ibid. p. 18) であり、しかも發生的に見てすべて實踐的であり、合目的々であるといふことが純粹論理學者にとつて、たとへこの論理は頭から拒否せらるべきものであらうとも、リボーにとつてそれは十分の存在根據と存在價值を有するものであつた。

リップスは悟性の判断に對し、感情判断を區別し、後者が對象に對するわれわれの關與に向けられてゐるに對し、前者は對象が請求する妥當性に根據を置いてゐる。

後者は判断の作用的原理が主觀的であるに對し、前者は客觀的である。

心理學の見地よりすれば、論理活動の中心は判断活動よりも推理作用である。けだし前者は觀念聯合としばしば混淆されるごとき形態をとるに對し、後者は聯合に見られるごとき、具體的事物による直接的暗示でないから。推理の本質は中間名辭を媒介とする既知のものから未知のものへの移行である。しかもこの中間階梯は單なる具體者でなくして抽象的一般的性質を屬性とするものでなければならぬ。推理は勝義における抽象作用を前提として成立する。リボーが『聯合は判断の條件である』(La logique des sentiments, p. 10)と云つてゐるのはこの間の消息を語るものであらう。概念は判断の結果であり、判断は抽象作用を前提とする二項間の主觀による前提であるといはなければならぬ。しかも悟性的推理においては、精神の運命が發足すべき普遍概念なしし原則を前提してをるに對し、感情的推理においてはかかる前提一般は有してをらない。しかしそれは暫定的に二つの型に分けられるとする。一は欲求に出發點をもつもので、この場合は問題の解決が追究せられ、その機構は理性論理で説明し得ない感情推理に固有のものを發見せん

とする欲求に導かれるもので、その基礎は動搖し、その過程は危げなものである。他は信仰に出発點をもつもので、あたかも證明のごとき様相を呈するもので、辯證とも呼ばれるもので、ある前提を基礎にもつてをり、しかもその推理作用は信する者にとつては極めて確實なものでありながら、不信者にとつては實に下らない理由の發見である。いまここで我々の當面の問題となる想像的推理は前者の型式に所屬するものである。(Ibid., chap. II. 3. Les rupperts)

リボーによればこの形態の推理は、感情的推理のなかでも最も完全で、且つ最も重要であるとともに、また最もしばしば發見されるものであるといふ。『これはまた發見的推理の感情的形態であるといつてよい。それは信仰固有の推理——それが推理するとして——であり、人類の個人的ならびに社會的歴史においてまた第一次的なものであつた。しがし想像的推理を創造的想像力(發明の能力、構想力)と混同してはならない。これら兩者の心理學的過程は多くの點において類似してゐるけれども、本性的に相違するものでない。想像力の唯一の目的は創造することであり、もつとも平俗的なものから最高のものにいたるまで、いかなる發明もかならず新しきもの

(すくなくとも個體にとつて、何故ならこの新しさが種にとつては單なる反復である場合もあるから)を前提する。たしかに感情生活は、常に必要とか本能、欲求から生れて來る創造に參與する、しかしこの原本的衝動を別にすれば、感情的要素が欠けてゐたり、また無視し得たり、さらにその本性上創造者の仕事から排除される場合がしばしば起つて來る。……想像的推理は常に感情的要素をふくみ、またこの條件においてしか存在せぬものである。しかしその目的は創造にあることが殆どなく、

反對に自己固有な方法、即ち想像的構成によつて現存する眞理を發見ないし樹立せんと主張する。したがつてこの推理と發明の能力との差異は、その目的、それ(推理)が客觀的と考へる結果にあるが、使用せられた方法においては類似してゐる。(Ibid., pp. 95-96)

一つの例を擧げておかう。占術は理性論理の及ばざる超理性的な問題解決のために用ゐられる想像的推理の構成物といつてよい。占ひの起源は極めて古く、またその適用される對象も公私生活のあらゆる行爲にわたつてゐる。ギリシヤ、バルフォイの神話はもとよりのこと、ルネイサンスの時代においても王侯貴族の官吏として占星學者が抱へられてゐた有様である。彼らの教養は傳習に

より、また膨大な書物によつて修得せられるもので、各々の現象集團に對し特殊な術語を有してゐる。電光の多樣さによる占にも、際限のない觀察と微細さに細分され、星學者は實に、分類、演繹、歸納、區分のもつれ合つた迷宮といつてもよい。しかしたとひ科學者にとつて彼らの過程そのものがいかに輕侮の對象とならうとも、心理學の立場からは、理性と關係なき論理の必然性を肯定する人間性の表現としてこれを重視しなければならぬ。占術には二つの型があつて、一は「直觀的」なもの、例へば夢、死者の呼び出し、神懸りのごとき直接的なもの、他は「歸納的」ないし「演繹的」なもので、その材料となるものは、地、水、空、星、氣象學的な現象、人間、動物、無生物、籤、敷の組み合わせなど、あらゆる方面にわたつてゐる。

占術の一般原理となるものは、宇宙一切のものが相關的な状態にあり、しかも最も似つかはしく無い要素の間にも相關性があるといふことである。この原理を基礎にして占ひの特殊要素を次の三つに分けることができる。

一、感情の要素、これはまづ(1)神とか運命とかのごとき超自然的な力がなんらかの仕方で問ひかけられた質問に答へるであらうといふ信念を生み出す強烈な欲求であ

り、したがつてこの信念は欲求とまさに正比例するものである。(2)質問方法の選擇。質問者は數多の有效な方法の中である特定のものを選び出す。(3)感情にもとづける極めて原理的な推理。たとへば鳥の夜啼きは死の豫兆であるとか、悼ましき夢からそれと反對の現象を推論することきも。(4)回答に先立つ期待の状態。即ち希望と恐怖との間の動搖が指摘せられる。二、想像的要素。

電光が天の胸底を見せるごとく考へられるやうに、自然や人間性の表現が、隠れた、判じもの的な意味を與へるもので、つまり具體的知覺や心像が象徴的心像に變形せしめられるのである。三、理性的要素。星の位置によつて戰爭の結果を豫想したり、人の運命を豫知したりすることで、この結論の發見には、種々の觀察、歸納、演繹、計算が基礎になつて、その推理形式は理性的形式を裝つてくる。その推論結果はたとひ結果的にみて理性推理と類似してゐようとも、前者の原理はあくまで主觀的、個別的な原理であるといはねばならない。(Ibid., Chap. III. Sect. III)

以上想像的推理の原理とその特色を簡単に紹介したが、その目的はリボーの指摘せるごとく、想像的推理と構想力のもつ構造の類似性であり、したがつて後者の理解に



前者と比較考量することが我々の理解を深める點に貢獻するところ大であると信じたがためにほかならない。構想力がその全面的な表現を示してゐるのは神話の世界であつた。しかも神話の中には原始人の優れた創造性を示す所産とともにまた巧な證明の實例も散見せられる。もとよりこの外種々の型式の聯合もあれば、初歩的な理性論理も、その外さまざまな心理學的現象もあらう。しかし問題はその中心とも見らるべき構想力の原理とその解明である。(未完)